

さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(13)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・連載・おさしづの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
 - 夕づとめ…毎夕・7時00分
 - 元旦祭…1月1日午前0時30分
 - 春季大祭…1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭…10月21日午後1時30分
 - 月次祭…毎月21日午後1時30分
 - 春・秋季霊祭…3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の📍マーク。市立公民館の裏・西側です。



■狭山分教会五代会長二十年祭

天理教では、出直した(亡くなった)人を偲ぶ日を決めて、亡くなって10日、30日、50日、1年、5年、10年、20年…とお祭りを催します。

来月4月28日に、狭山分教会・五代会長の二十年祭が執り行われます。これにあわせて、同教会神殿の畳を新調することになりました。すでに40年が経過しています。神殿中段が30枚、参拝場は90畳あります。皆様の志を集めたいと思います。ご協力よろしくお願います。

立教172年 春の学生おちばがえり

- テーマ 世界の友にをやの思いを ~今、心をついに~
- 主催 春の学生おちばがえり実行委員会/天理教学生担当委員会
 - 趣旨 道につながる学生が、こそっとおちばに寄り寄り、異社様のお言葉を聞いてをやの思いに心をついに揃え、陽気ぐらし世界実現に向かって、一歩一歩に成人の道を行んでいくことを誓い合う。
 - 日時 3月27日(金)~29日(日) (2泊3日)
 - 集合 午前9時30分 天理駅近鉄改札前
 - 参加対象 高校生(新1年生を含む)、大学生、各種専門学校生
 - 宿舎 第十二母屋(大阪学生会館)
 - 内容 式典(興社様お言葉、直属アワー、別席、後夜祭「春まつり」、大阪学生会フェナーレ等)
 - 参加費 4000円
 - 携行品 ハッピ、替替え、筆記用具、洗面具、雨具、保険証(コピー可)、席札(別席者のみ)
 - 連絡先 各支団学生会担当委員まで

《編集後記》

▼3月1日、大阪教区福祉部主催の「福祉研修会」に行ってきました。北九州市でユニークで先進的な親活動を展開されている土井高德氏の話、たいへん刺激的な内容で、感動しながら聴かせてもらいました。▼同日、その場に、先日南河地府民センターで講演されました佐々木さんの姿も見えました。100人くらいは集まると思っていたのですが、大方の予想に反して30名と、ちょっと寂しい会でしたが、熱心な方ばかりで、集まられた方は、質疑応答の内容から推し量ることができました。▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご笑覧ください。☺

P://sachihiro.com 「#やまさんのブログ」から入れます。(わ)

わたひろ 第35号
編集兼発行人・山口 渡
平成21年3月8日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072136512571

「みんなの教理入門」連載・13 暮らしの息吹

天理大学名誉教授・芹澤 茂



天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します

生活を反省してみると、日常は大概あまり深い心でくらしわけではない。仕事に追われている、感情のままに動き、ああきょうも一日忙しかった”と言って日を送るのが普通である。

”自分はこう思う”とか”自分がこうしたいのだ”とか、自分を中心としてものを見ている。もちろん、価値という万人に共通した基準に基づいて考え・行動しているつもりではある。そしてこれが生活と繋がっている。

しかしさらによく心の内面に入ってみると、自分には価値があるからそうしたのではない。ただそう思ったただけだ”ということが沢山みつかる。そしてこの第二の生き方の方が本当らしく思える。

この第二の生き方を理解しておくことが、信仰生活には絶対必要であるから、説明し難いことであるが、以下この点を述べてみたい。

まず例をあげる。

三月雛祭の季節になると、雛人形を並べてぼんぼりを飾り、供え物をする。お雛様と一緒に白酒

を飲む。子供も大人も、そうして春の一刻を過ごす。だけれど、何のためにそんなことをしているのか”などとは言わない。

秋になってお月見をする。月見だんごを食べて、お茶を飲んで月をみている。

ところがあるとき、そのような席に、ある外国の学者が呼ばれていた。しばらくするとその人は、”それで、これから何するんですか”と言ったというのである。

お月見をしている人は、何かのためにお月見をしているのではなく、月を見、だんごを食べ、お茶を飲むことによって、人間が生きている不思議な神秘にみちた世界を味わっているのである。

この質問をした人は、日本人も大部分はそうかも知れないが、いつも自分の頭や感覚で想像しているだけの意識の世界(価値の世界)に生きているものだから、そのような神秘にみちた世界(実在の世界。親神橋の世界)に気付かなかったのである。

「自分が……」という我(が)をとって、親神様に心をおまかせして、そして現在おかれていた世界、お月見でも、教会の月次祭に参拝するときもあるいは、その他何事によらず、生活の中で出会っている事件でも、それに没頭するような心掛ける。それが信仰の世界である。

第二の例をあげる。

悟りということは宗教の問題としては最も大事なことでとされている。これは特別なことではなく、日常だれでも経験していることである。夕焼の空をみると、学生が下宿で家をおもうとき、何かとても美しい物に出会ったときなどは、はっとして心が洗われるように思われる。しかしこの悟りは非常に短い時間のことである。悟りは言葉にもならないようなすばらしい世界を経験することであるから長ければ長いほどよいように考えられるが、普通は短いほどよい。長いと人間には耐えられない。例えば故郷の家をおもうあまりホームシック(病気)になって、家に帰らねば直らなくなるようなものである。

ある。

以上二つの例のように、日常の世界の裏側に神秘的な世界があつて、人間はこれをほんの少しずつ味わっているのである。味わうことによつて日常の生活が楽しく、明るく、陽気にもなっていく。

このようなくらしに対してどんな教訓が教えられているかを考えると、いくつかあげられる。「慎(つつし)み」もその一つで、なるべく日常の世界、すなわち社会や文化によつて重荷となっている生活を簡素にして、言動や生き方を慎んでいくことが大事である。

春になると、春の息吹によつて、つぼみかえみ・ほころび、やがて花が咲く。信仰の世界でも同じで、人間の生活を守護されている親神様の息吹によつて、生活の中に喜びや楽しみが満ちて来る。陽気ぐらしとは、そうしたものであるから、この息吹を感じ、味わうように心掛けることが大事である。

芹澤 茂(現・天理大学名誉教授)

この記事は、昭和59年に「天時時報」紙に連載されたものです。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

(善本社刊)から

旬

筍(たけのこ)は、地面に顔を出して十日過ぎると竹になる。筍の旬は、極めて短い。

そう言えば、人間の一生も就職、結婚を始め、様々な運命の転換の旬がある。しかし、

どの旬も筍と同じく逃げ足は早い。

だが、すばやく旬をつかみ、運命を伸ばす人等もいる。

調べると、

みな素直な心の持ち主で、

逆に、旬を見逃す人等は、

先案じの強いわがまま者だった。

つまり、旬は、

幸福を素直な人に届ける

運び屋さん。

おさしづの点滴 (14)

心こころで思おもう通とおりに障さわり付つく
のやで。急せくから咳せきが出でる。
この理りを覚おぼえてくれ
ねばならん。

(21・1・23)

【解説】

人間の心づかいを親神様がうけとられて、その心づかいにふさわしい守護を身の上に示される。このおさしづは、こうして見せられる身上の印から神様の思召がどこにあるのか、その悟り方を端的に教えられたものである。

素朴な表現で説かれているが、陽気ぐらしの教えの根本である。心で思うその通りに身の上に障り(ものごとの進行をとどめようとする事情)として現される。

「急く」から「咳が出る」は語呂合わせのようだが、正鶴を射ている。「止

心で思う通りに障り付く

める心あれば止まる。冷す心あれば冷える。直きくの事情を直ぐと聞かすがよい。」(23・11・24)と同様、直截に論されている。むずかしく考えず、すばりそのまま信ずればよい。

さらに「この理を覚えてくれねばならん」、心と世界がつながっていることを体得して覚えてくれ、と言われる。親神の働きの「もと」が各人の心にあること、この「もと」がわかればそれを改めることができる。「天理に目覚めて心を入れ替える」(論達第二号)とは、まさにこのことなのである。

【おさしづ全文】

巻一(明治二十一年一月二十三日)

梅谷たね身上願

さあく身の処さしづよう聞き分け。分かん。どんな事こんな事、今の道、理をよき聞き分け。ずつな人間何遍話伝えてある。幾重話でも、伝えても、めんく心で心出来る。それで印がある。何遍尋ねても同じ事、よう聞いてどういうもの、めんく

思つやう。何にも思やせん。何にも思やせんや印ありやせん。急き居るくくでならん。あちらが悪い、こちらが悪いというのは、これをよう聞き分けねばならん。心で思う通りに障り付くのやで。急くから咳が出る。この理を覚えてくれねばならん。そこで一つの理を論し聞かせて置く。子供機嫌好い時に、何にもやろ、これもと思つやろ。その日の処、折々思ひ出であつ。親のためには皆子、神のためには同じ子供、一寸も違やせん。子供機嫌好き遊びあちらにやり、どうかすると又かいやもうくく、子供々々もならんといふ。小人々々心年取れたなら、年取れど心よ聞き分けくれねばならん。どう思つても同じ事や。どう思つても三年も忘れかたと思つような日もあつた。なれどしゅじつくといふもの、忘れようと思つたて、忘れられるものでない程に。その道日を通り経ちたなら、何でも神の思つよつになるのや。このやしき一つの証拠がある。